タイ王国　　派遣期間　２０１４年４月～２０１７年３月

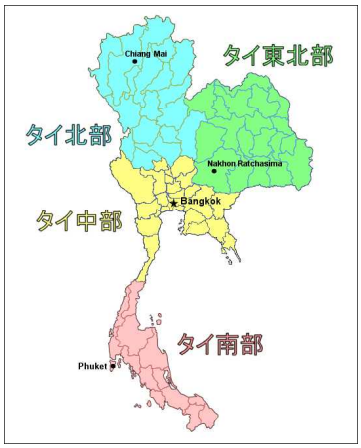
バンコク日本人学校　帰国報告

名寄市立名寄東小学校
教　諭　　中嶋　清太郎

１ タイ王国の概要

◇公用語：タイ語　　◇首都：バンコク都
◇通貨：タイバーツ（１バーツ＝約３円）
◇国王：ワチラロンコン国王（ラーマ１０世：２０１６年１２月即位）
◇首相：プラユット・チャンオチャ首相
◇面積：513,120㎢（日本の約１.４倍）
◇人口：6,718万人（2016年）
◇民族：タイ族75%、華人14%、
　　その他マレー系、インド系、モン族、カレン族
◇宗教：仏教（南方上座部仏教）95%、イスラム教4%、
　　キリスト教、ヒンドゥー教、シーク教、道教など

（１）地理



タイ王国は、インドシナ半島のほぼ中央に位置し、陸地ではマレーシア、ミャンマー、ラオス、カンボジアの４か国に囲まれ、海岸線では、タイ湾（シャム湾）とアマダン海に面している

タイ国内は、一般的に「北部」「東北部」「中部」「南部」の４つに分けられる。古都チェンマイを中心に、灌漑設備の整った稲作が行われる北部タイ。この地域には、ミャンマーとの国境にかけて少数民族が生活する山岳民族の村もある。ラオスとの国境までに至る東北部タイは「イサーン」とも呼ばれている。農業が中心産業となるが、干ばつや洪水などの被害も多く、最も貧しい地域と言われている。中部タイは、チャオプラヤー川流域を中心とする地域で、肥沃な土壌でタイの穀倉地帯となっている。その中心にある首都バンコクは、政治経済の中心となっている。マレー半島部に位置する南部タイは、観光地で有名なプーケットやサムイなどの島々が点在している。

（２）気候

タイは、熱帯モンスーン気候に属する。一年が雨期と乾期に分かれ、乾季はさらに寒季と暑気に分けられる。

◆乾期：暑気（３月～５月）
→高温多湿のタイの夏。気温は平均３０℃。湿度が高く、蒸し暑い。
◆雨期：雨季（６月～１０月）
→毎日１時間程度の激しいスコールがあり、道路が冠水し、各地で洪水が起こる。
◆乾期：寒季（１１月～２月）
→日中の気温は２５℃～３０℃になり、雨も降らず過ごしやすい。

【タイの雨期・冠水した道路】

（３）歴史

現在のタイにタイ族の国ができたのは、１３世紀のことである。その祖先（タイ語系の民族）は、紀元前には中国の四川省や雲南省辺りに部族国家を形成し散在していたと言われている。彼らは稲作の適地を求め、次第に半島南部へ向かって南下し、１世紀頃にはタイ領北端まで下り、アイラオ王国を建国している。

その後、興亡を繰り返しながら半島部に勢力を張っていたモン・クメール系民族（カンボジア軍）を１２３８年に撃破しスコータイ付近にスコータイ王朝を建国し、これがタイ民族の統一国家で、以来７００年余りにわたり次の４つの王国が興亡している。

◆スコータイ王朝（１２３８年～１３７６年）
→「田には米あり、水に魚あり」と言われるほど豊かな大国。第３代ラムカムヘン大王は、カンボジア文字を基にタイ文字の基礎を作った賢王として有名。
◆アユタヤ王朝（１３５０年～１７６７年）
→中国、インド、ヨーロッパとの交易を行い国際商業都市として繁栄。当時のアユタヤは世界でも有名な大都会で日本人町もあり、山田長政ゆかりの地でもある。
◆トンブリ王朝（１７６７年～１７８２年）
→政治権力が分立する中でビルマ軍を破ったタークシンが現在のバンコクの対岸に位置するトンブリに開いた王朝。１７８２年にチャックリ（ラーマ１世）がバンコクに遷都。
◆ラッタナーコーシン王朝（１７８２年～）
→チュラロンコーン王（ラーマ５世）が中央集権化と近代化を行い、タイの独立を保つ。司法・行政制度を整理し、財政を整え、鉄道、教育制度、軍制改革、奴隷制度廃止など、近代国家の基礎を築き、立憲君主制を確立した。２０１６年に国王として７０年在位したプミポン国王が崩御し、現国王ワチラロンコン国王が即位した。

【プミポン国王】

（４）政治

国家元首は国王となっているが、実質的な最高指導者は、国家平和秩序評議会（NCPO）議長のプラユット将軍となる。国家平和秩序評議会は、２０１４年５月２２日の軍事ク

ーデターにより全権を掌握した軍事政権が創設した組織で、評議会議長が首相を兼ね、行政権をもつ内閣や立法権をもつ国家立法会議を上回る権限を保持しており、司法権をもつ憲法裁判所に対しても政治的影響力を行使している。クーデターで廃止した国民議会（上下院）に代わり国家立法会議が設置されたが、過半数の議員を国軍の軍人や退役軍人が占めている状況となっている。

2 バンコク日本人学校の概要

（１）沿革

バンコク日本人学校は、大正１５年（１９２６年）創立の盤谷日本尋常小学校を前身とする、世界一歴史のある学校である。第二次世界大戦のため一時閉校となったが、昭和３１年（１９５６年）にサラディーンの日本国大使館内に「在タイ日本国大使館附属日本語講習会」として２８人の子どもたちと４名の教師により改めて開設された。その後、反日感情の高まりなど様々な経緯から、泰日協会の協力を得て、昭和４９年（１９７４年）に現在の「泰日協会学校」としてタイ国政府から正式に義務教育学校としての認可を受けた。平成２８年度は児童・生徒数２７０３名、教職員２２３名でのスタートとなった。

【バンコク日本人学校・教職員集合写真】

（２）学校教育目標

○思いやりのある子（徳育）
○創造性を発揮し、積極的に学ぶ子（知育）
○心身の健康をつくる子（健康）
○国際性豊かな子（国際性）

【泰日協会学校・校章】

（３）教育課程

【ステータス・設置機関等】
＜学　校　名＞泰日協会学校（バンコク日本人学校）
（タイ語・校名）โรงเรียนสมาคมไทย-ญี่ปุ่น
（英語・校名）THAI JAPANESE ASSOCIATION SCHOOL

＜ステータス＞タイ国認可私立学校（日本国文部科学省在外教育施設認定校）
＜　設置機関　＞泰日協会（会長：Mr. Kalin Sarasin）
＜運営責任者＞泰日協会学校理事会
(理事長)黒田　伊佐央
(ディレクター)パースク・プラカスカン
(校長)室賀　薫（日本国文部科学省派遣）

【構成（平成２８年度）】
小学部７４学級（特別支援３学級を含む）、中学部１８学級（特別支援学級は未設置）

【タイ語・英会話】
タイ国教育省の指導により、小学部１年～中学部３年まで週１時間のタイ語の授業が義務付けられている。本校タイ語講師によるオリジナルテキストにより学習を進め、現地語でのコミュニケーション能力を育成している。
また、小学部３年以上で英語のネイティブスピーカーと日本人教師による TT の英会話の指導を行っている。テキストは平成２８年度より学校独自のものを使用している。また、平成２９年度からは小学１年生から英会話の授業を行うなど、在外教育施設ならではの外国語活動を実践している。

【水泳指導】
常夏の気候を生かし、年間を通して水泳指導を行ってる。担任または教科担当と、タイ人水泳コーチが指導に当たり、小学部５年の臨海学校では学習の成果を発揮する場として海での遠泳（５００ｍ程度）を実施している。

【各学年の取組（主に校外学習）】

１年生	２年生	３年生	４年生	５年生	６年生
ﾄﾞｩｼｯﾄ動物園 ﾗﾏ９世公園	ｻﾌｧﾘﾜｰﾙﾄ ﾙﾝﾋﾟﾆ公園	ﾏｯｸｽﾊﾞﾘｭ 味の素工場	ﾊﾞﾝｹﾝ浄水場 青少年科学館	ﾁｬｱﾑ臨海学校 ﾄﾖﾀ自動車工場	ﾁｪﾝﾏｲ修学旅行

【4 年生・ﾊﾞﾝｹﾝ浄水場見学】

【5 年生・チャアム臨海学校】

【6 年生・チェンマイ修学旅行】

【運動会】

平成２６年度より児童生徒数の増加に対応する形で、小中別日程での開催となった。例年、雨季が明ける１０月下旬から１１月上旬の実施している。運動会当日は、延べ人数で１万人程度の来校するほど大規模な運動会となる。

【運動会会場グラウンド】

【交流学習会】

全学年で発達段階に応じ、現地の小学校や中学校と連携し、交流学習会を実施している。隔年で本校と相手校を交互に会場とし、午前中の活動から弁当の時間までをともに過ごし、それぞれの国の伝統文化やスポーツ交流をすることで友好を深めるとともに、日頃のタイ語学習の成果を発揮する場ともなっている。

【交流学習会】

（４）職員研修

【学年・教科研究部会】

平成２８年度は、小学部は学年単位、中学部は教科を単位とした部会を設置し、全体研究テーマを基に副題を設定して研修を行った。各学年で全体研修に提案する研究授業だけでなく、年間を通して当該教科を中心に実践的な研究を重ねている。

【学校採用教員研修】

本校の日本人教員の実に半数を占める学校採用教員については、上記課題研究とは別に研修の場を設けている。対象教員に定期的に行われる研修はもちろん、文部科学省派遣教員と育成ペア（トリオの場合もあり）を組み、学級経営、教科指導、保護者への対応など日常業務全般について指導助言を受けられるようになっている。

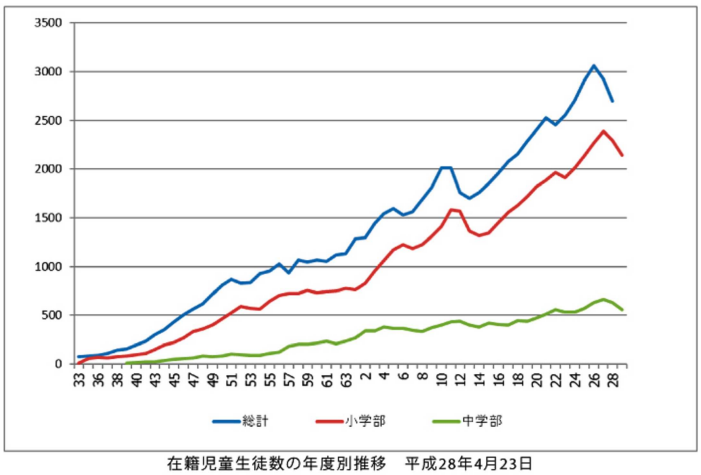
【職員宿泊研修】

在外教育施設の利点を存分に生かせる研修として、毎年夏季休業中に宿泊研修が実施されている。内容は、現地の小中学校での授業実践と訪問地域との交流となっている。現地校での授業では、事前の実地踏査、打合せで相手校の意向も伺いながら、現地の子どもたちが楽しく日本文化に触れることができるように、各教員が得意分野を生かした実践を行っている。例年、日本語や習字、着物、折り紙、野球や相撲など見るだけでなく体験する活動を取り入れた実践が見られ、相手校の子どもたちだけでなく現地の先生方にも好評となっている。

（５）特色と課題

本校の最大の特徴は、児童生徒数が世界一の規模を誇る学校である。平成２６年度には３０００名を超え、日本国内でも類を見ないマンモス校となっている。また、様々な

都道府県出身の児童生徒、および教職員が集まっている。多様な関わりがあり、３年間過ごすだけで日本全国、そして世界にも人間関係の輪を広げることができる。また、各学年の行事や運動会での発表においても、発達段階に応じた迫力ある表現活動が行われ、大規模校ならではの良さを随所に感じることができる。



在籍児童生徒数の年度別推移　平成28年4月23日

一方で、児童数が多く体力テストは実施されていないため、具体的な数値では比較することはできないが、以下の要因から体力の維持向上が課題となっている。第１にほぼ全ての児童がスクールバスと自家用車での登下校となっているため、歩くことが極端に少ないことである。各コンドミニアムのロビー前から学校敷地内の駐車場までの送迎となるので、実際に歩く距離と時間はほとんどない状態となっている。第２に運動、遊戯スペースの不足である。バスで一斉に下校するため、放課後校庭で遊ぶことはできない上に住居周辺に国内のような児童公園はなく、習い事やクラブチームで定期的に体を動かさない限り、運動する環境が極端に少ない状態となっている。

また、危機管理面では、治安が比較的安定しているものの近年デモやクーデター、爆発事案なども発生し、児童生徒および関係者の安全の確保が最重要課題となっている。在タイ日本大使館をはじめ、関係諸機関と連携し対応を協議するとともに、不測の事態に備え SMS などで保護者への情報伝達を迅速に行えるよう計画的に訓練を重ねている。

3 バンコク日本人学校の特色ある教育活動（現地校との交流学習会）

（１）本校の交流学習会の歩み

本校の国際理解教育の大きな特色は、海外にある日本人学校ということを生かし、現地校（タイ国の学校）との交流学習が毎年定期的に行われているという点である。現在のように定着化されるようになるまでには、数多くの努力と工夫が図られ、現在の活動へとつながっている。

本校の前身は１９２５年（大正１５年）に盤谷国民学校として設立されたが、第２次世界大戦のために閉鎖。そして戦後１９５６年（昭和３１年）、日本国大使館の中に大使館附属日本語講習会として再発足された。やがて、１９７４年（昭和４９年）にタイ国の私立学校として正式に認可されると、２年後の１９７６年（昭和５１年）から近くの国立ダラカーム校との交流が始まった。その頃は、主に運動会を交流の場としたスポーツ交流が中心であった。ダラカーム校とは排日運動が吹き荒れたときにも交流を続け、現在に至っている。

【1976 年ダラカーム校を招いた運動会】

（２）交流学習会のねらい

【平成28年度の方針】
①現地校との交流を通して、児童生徒の現地理解を深める。
②日頃の外国語学習の成果が表れるような活動を設定する。
③相手校との打ち合わせ会で情報交換を綿密に行い、より内容のあるものにする。

【低学年のめあて】
タイの子どもたちと仲良く協力して作業したり、一緒に体を動かしたりすることができる。

【中学年のめあて】
タイの子どもたちと一緒に活動する中で、その喜びを知るとともに、教え合い、励まし合うことができる。

【高学年のめあて】
タイの子どもたちに進んで働きかけることによって、関わり合いを維持し、お互いを理解することができる。

（３）各学年の交流の様子

【１年生】カセサート校

スポーツ交流（左）では、ボール運びリレーを行い、文化交流（右）では、紙コップを使ったけん玉づくりに挑戦し、完成後は自分で作ったけん玉で一緒に遊び交流を深めた。

【２年生】カセサート校

スポーツ交流（左）では、タイ語でのじゃんけん列車（「パオ、ジィング、チュップ」）を行い、文化交流（右）では、折り紙を使って紙飛行機づくりに挑戦し、完成後は自分で作った紙飛行機を一緒に飛ばしながら交流を深めた。

【３年生】ダラカーム校

スポーツ交流（左）では、タイ語を使って、「クワー、サイ、ナー、ラン」という掛け声とともに「ジェンカ」を行い、文化交流（右）では、タイのお祝い事などで使われる「リャンプローイターン」の作り方を教えてもらった。

【４年生】シーナカリン校

スポーツ交流（左）では、シーナカリン校の児童と合同でチームを作り、綱引き大会を行った。文化交流（右）では、事前に鶴の折り方をタイ語で覚え、折り紙に取り組んだ。

【５年生】シーナカリン校

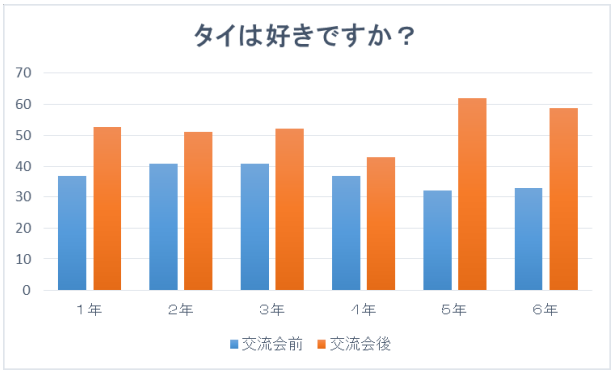
スポーツ交流（左）では、力と心、タイミングを合わせながら「ボール運びリレー」や「台風の目」を行った。文化交流（右）では、「福笑い」に挑戦し、パーツを動かす言葉をタイ語で伝え、楽しみながら交流を深めた。

【６年生】メーゲットノイ校

6年生は、修学旅行に合わせて、現地校との交流を行った。文化交流（左）では、日本の習字を紹介し、漢字一文字を色紙に書いたり、漢字の意味をタイ語で伝えたりした。また、各国の伝統演武を披露する場面では、空手の型（上）を日本文化として紹介し盛り上がった。

（４）交流学習会を終えて

交流学習の実施前と実施後に各学年で児童に行ったアンケートの項目の一つ「タイの国は好きですか？」という質問に対して、右記のグラフに示された結果が見られた。



「とてもすき」と回答した児童が各学年で事前アンケートの時点で全体の３割～４割いることが分かった。回答した理由を見てみると、「優しい人がたくさんいるから。」「食べ物がおいしいから。」「１年中暖かくて、過ごしやすいから。」という意見を中心に、普段の生活の中で関わるタイの人々の優しさや、タイ料理や仏教などの文化、また温暖な気候による過ごしやすさなど挙げている児童が多く見られた。事前と事後での推移を見てみると、「とてもすき」と回答した児童が、どの学年でも伸びていることが分

かった。これらの結果から、交流学習会等の現地理解活動を通して、タイの人々や文化に触れる機会を持つことで、タイへの印象が良くなってきていると考えることができる。

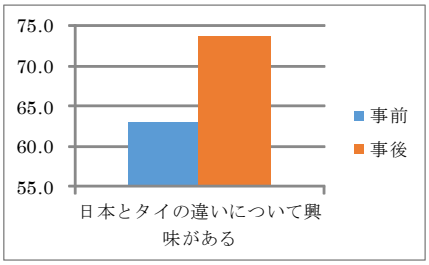
現地校との交流学習の集大成である６年生のアンケート（H28年度）では、

①日本とタイの違いについての興味の高まり

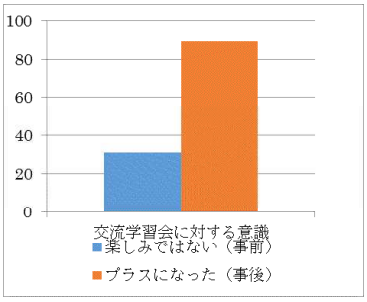
②タイの現地校との交流学習会に対する意識の高まり

③タイ国への理解への興味・関心だけにとどまらず、他の国への興味・関心の高まり

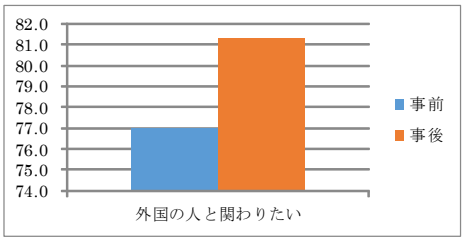
という三つの傾向が分かった。



まず、右のグラフが『①日本とタイの違いについての興味の高まり』についての結果である。交流学習会を行う前と後では、児童の日本とタイの違いについての興味が６３％から７３％へと高まっているのが分かる。交流学習会を通して、一緒に遊び、スポーツをし、食事を取ることで、お互いの国の文化や生活の違いを感じたのだろう。その違いを乗り越え、本校児童が準備してきた日本の文化を楽しんでもらい、またタイの文化の素晴らしさを肌で感じることで、タイの文化への興味が高まったのではないかと考える。ここに交流学習会の大きな意義があると思う。

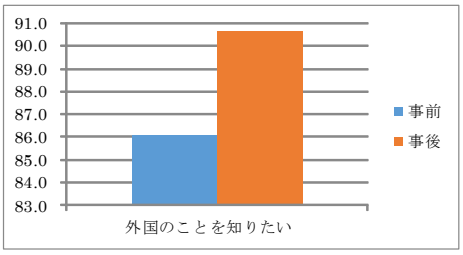


次に、右のグラフは『②交流学習会に対する意識の変化』を示したものである。交流学習会を行う前は、児童の３１％が交流学習会に対してあまり前向きな気持ちではなかった。しかし、交流学習会後には「交流学習会は自分にとってプラスになった。」と答えた児童は全体の９０％にも達した。「昨年、タイの学校の人々に迎えられて嬉しかった分をお返ししたい。」という思いで総合的な学習の時間のみならず休み時間を使って、装飾準備や組体操・空手、合唱発表の準備や、文化交流・スポーツ交流の練習を行ってきた。その交流学習会を迎えるまでの自分自身が培ってきた力が交流学習会本番で発揮することができたことに達成感ややりがいを実感した児童が多かったのだと考えられる。また、本校児童は普段の生活の中で、タイの同世代の人と接する機会は少ないため、タイの文化・習慣、言語を学んでも実際に活用する場面は少ない。しかし、今回の現地校との交流学習会ではタイの子どもたちと直接触れ合う体験ができ、これまで本校児童が学んできたタイの文化・習慣、言語が実際に活用できる絶好の機会となった。そこで、学んだことを生かしタイの子どもたちとコミュニケーションを取ることができたことは、子どもたちの大きな自信につながったのではないかと考えられる。このような機会が与えられるのも在外教育施設にいるからこそであると感じる。ここに、２つ目の交流学習会の大きな意義を感じる。



最後に、右の２つのグラフは『③タイだけでなく、外国の人と関わりたい・外国のことを知りたい』という項目の結果を示したものである。本校児童は海外で生活しているがゆえに、もともと異国に対する興味・関心は高いが、交流学習会を行うことによっ

てさらに異国への興味・関心が高まっていることが分かる。交流学習会で実際に同世代のタイの子どもたちと関わり、充実した時間を過ごしたことで、より一層外国の人と関わりたいという気持ちが高まったと考えられる。また、交流学習会では、実際にタイの子どもたちがタイの伝統的な踊りを披露し、その曲調や衣装の豪華さ、踊りの迫力を実際に目にした本校児童は非常に感動していた。そのようなタイの文化の素晴らしさを感じることが「もっと他の国のことも知りたい」という好奇心をかきたてたのではないかと思う。



これらのことから、交流学習会全体を通して改めて交流学習会が児童の国際理解に有意義なものであると感じた。実際にタイの子どもたちと触れ合い、言葉や身ぶり手ぶりなどのジェスチャーを使ってコミュニケーションをとって交流することが、児童にとって大きな学びとなり、今後の国際理解への基礎となるのではと考える。児童が抱いている国際理解への興味・関心をさらに育てていくことが、在外教育施設が担う国際理解教育の意義の一つであるということも感じた。

今後は交流学習会のみならず、日常の生活の中でも異国を感じ、常に異国について思考する児童を育てていくことが、在外教育施設における現地理解教育なのではないかと考える。そのことが自国も他国も愛し、それぞれの人や文化、国を尊重できる国際的な視野をもった児童の育成につながると考える。

4 終わりに

子どもたちの住む地域は、トンロー、エカマイ、アソークというエリアが中心で、家賃が日本円で30万円くらいのプール付マンションに住むのが一般的である。居住地には、日本の食材を扱うスーパー、日本食のレストラン、ラーメン屋などが数多くあるため、日本と同じような生活を送ることも難しくない。また、学習塾や英会話教室、テニススクール、サッカースクール、バレエ、ダンス、空手など日本人を対象にした数多くの習い事が充実していた。海外にいるにも関わらず、日本にいるのではないかと錯覚してしまうほどの生活を送ることもできるのがバンコクという大都会である。海外ならではの大変さと同時に恵まれた環境も存在する。

毎年、1000名近くの子どもが日本からタイに来て、同じ数の子どもが日本に帰国していく。子どもにとっては望んで来た「タイ」ではなく、誰もが不安を抱えてやってくる。最初は、日本の友達と別れ「タイなんか来たくなかった」と悲しい涙を流す子どもたち。それが、帰国時には「まだタイにいたい」とまた涙を流しながら日本へ戻る子どもたち。出会いと別れを繰り返しながら逞しく成長する子どもの姿をたくさん見ることができた。

最後に、多くの関係者に方々に支えられ、家族と共に過ごすことができた3年間に感謝したい。また、同じ情熱をもった派遣教員との関わりも私にとって貴重な財産となった。そして、現地タイの人々には、公私共にお世話になり、彼らの助けがなければ海外で生活することが非常に困難になっていたことを痛感する。ขอขอบคุณ